



Title	北奥方言のモダリティ辞
Author(s)	加藤, 重広; Kato, Shigehiro
Citation	北海道大学文学研究科紀要, 130, 125(左)-157(左)
Issue Date	2010-02-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/42727
Type	departmental bulletin paper
File Information	ARCS130_004.pdf



北奥方言のモダリティ辞

加藤重広

1. はじめに

本論は、日本語・東北方言のうち、北東北（北奥）方言、特に青森県八戸市を中心とする地域の方言でのモダリティ辞を主に扱うものである。

なお、ここで言うモダリティ辞とは、モダリティを担う「辞」的要素の謂であるが、その多くは伝統的な文法で「助動詞」とすることが考えられるものの、活用が衰退したり、活用を喪失することによって「助詞」と見るべきものも含まれているので、一括して「辞」と称する。

2. 当該方言の概略

本論で扱う地域方言について、まず概略を述べる。以下では、まず、地域方言区分に関する基本的な考え方をたどり、その中に位置づけることを考えたい。

2.1 方言区画における位置づけ

方言区分に関する考え方はいくつかあるが、近年は、先ず、日本語をまず琉球方言とそれ以外（＝本土方言）に分け、後者について、さらに八丈島方言とそれ以外（＝内地方言）に分けるのが一般的である。これら島嶼部方言とそれ以外に分けることは単なる地理的区分以上に歴史的分岐や個々の方言の成立といった通時的観点から日本語を捉えるという意味を持つ。内地方言

の区分は、細部での違いはあるものの、大区分に関しては先行研究でもそれほど大きな違いはない。東条操.1953.¹ は、内地方言を、東部・西部・九州と分けているが、東部方言には、北海道方言・東北方言と関東方言と東海・東山方言と八丈島方言が含まれており、東北方言は、さらに北奥方言と南奥方言に分けられている。なお、八丈島方言は上に述べたように現在は内地方言に含めないことが多いが、東条.1953. の時点では地理的区分と方言の本来の姿を考慮して東部方言に含められていた。東北方言を北と南に分けることは一般的であり、それはすでに東条.1953. の時点で見られるわけである。

都竹通年雄.1949. では、琉球方言と本土方言を分け、本土方言を九州と本州東部と本州西部に分けている。本州東部は、(a)北奥羽、(b)南奥羽、(c)西関東、(c)八丈島、(d)越後、(e)長野・山梨・静岡に分けられる。(c)の扱いは、上述の東条.1953. と基本的に同じである。特徴的なのは、現在多く見られるような(a)を北東北3県、(b)を南東北3県とする単純な区分ではなく、青森県と秋田県の全域、岩手県の旧南部藩地域、山形県の庄内地域、新潟県の下越北部（旧村上藩）が(a)の北奥羽方言とし、岩手県の旧伊達藩地域、宮城県、福島県、栃木県、茨城県を(b)南奥羽方言としている点である。(c)西関東方言は、おおむね群馬・埼玉・東京・千葉・神奈川を含むが、関東方言にあたるものは(c)以外には設けられていない。

金田一春彦.1955. では、本土方言はやはり、九州方言、西日本方言、東日本方言に三分されている。これは、加藤正信.1977. が、内輪方言・中輪方言・外輪方言で知られる音韻特徴による方言区分に対して、俗に「金田一の第一次方言区画」と呼ぶものにあたる。そこでは、東日本方言は、東部方言と北部方言と八丈島方言に下位区分される（八丈島方言の扱いは、上述の東条.1953. や都竹.1949. と同じと見てよい）。東部方言には、(a)東京横浜、(b)西関東、(c)静岡・長野・山梨、(d)越後中南部、(e)東埼玉・房総が設けられ、北部方言には、(f)南奥、(g)北奥、(h)北越・北海道が設けられている。都竹.1949. と

¹ 本論では、引用文献に言及するとき初出時のみ姓名と刊行年を掲げ、それ以降は姓のみと刊行年を掲げる。

異なるのは、関東のうち、東京横浜といった当時の首都圏を切り離し、さらに埼玉東部と千葉を切り離して、関東を細分化している点であるが、(f)と(g)の範囲は、都竹.1949. でいう南奥羽方言と北奥羽方言とおおむね重なる。異なるのは、北海道方言と越後北部(下越)方言を1つに括っている点である。東条.1953. も都竹.1949. も、北海道方言を区分上重視しておらず、東北方言とまとめたり、北奥羽方言と括ったりといった概略的な扱いが見られる。金田一.1955. は、北海道方言を地理的な連続性とは別に下越方言との類似性をもって括るという判断を下していることになり、注目される。この点は、のちの佐藤亮一.1976. や柴田武.1995. などでも同様の指摘があり、金田一.1955. の先駆性と言うことができよう。金田一.1955. は、西部方言を大きく近畿式と非近畿式に分けている点にも創見を見ることができる。

井上史雄.2001. では、琉球方言とそれ以外(本土方言)、とし、本土方言を八丈島方言とそれ以外(内地方言)とし、内地方言を九州方言・西部方言・東部方言に分けているが、九州方言は、東部と西部に並ぶ大区分ではないが、かといって、東部方言内部や西部方言内部の小区分ほどでもなく、その中間の中区分とし、大区分としては西部方言に含まれると見ている。東部方言は、東北方言と関東方言と東中部方言に分けられ、西部方言に含まれる西中部方言との連続性を見る点は、創見と言えるだろう。東中部方言は、おおむね甲信越に静岡を加えた地域の方言に相当するが、金田一.1955. 同様に、北海道方言は、東中部方言に含められている。

以上の方言区画では、東北方言は、北海道方言と一括されているかどうかの違いはあるが、東北方言内部が北と南に二分されている点は変わりが無い。北東北(北奥羽)方言と南東北(南奥羽)方言は、現在の県境を便宜的に用いて、青森・秋田・岩手の北部三県と宮城・福島・山形の南部三県に分割するやり方と、いわゆる無型アクセントの地域を中心に南東北を括って、宮城と福島に栃木・茨城も含め、青森・秋田・岩手に山形海岸部を含めて残りを北東北とするやり方に大きく分かれている。

いずれの場合も、本論で扱う地域は、北東北(奥羽)方言に含まれている。方言区分の立て方は以上見たようにいくつかあるが、大区分から小区分に記

述すると「本土方言・内地方言・東日本方言・東北方言・北奥羽方言」に含まれると言うことになる。

2.2 北奥方言と南部方言

本論で扱う地域の方言を「南部方言」と呼ぶのは、予備知識がないと混乱を招くことになりかねないので、まず整理を兼ねて少し詳しく説明しておきたい。ここで「南部」というのは、地域区分における北部・南部・東部・西部というような区分ではなく、固有名詞としての「南部」であり、南部氏の所領であった南部藩を指す「南部」である。

そして、旧南部藩は、盛岡を中心とした盛岡藩に代表されるが、当初十萬石であった南部藩は、近世初期に八萬石の盛岡藩と二萬石の八戸藩に、幕府裁定により分割されたものである。このため、歴史的には八戸藩は盛岡藩の支藩ではないが、当該また近隣地域では八戸藩を支藩に近いものと受け止めることが多いようであり、言語的アイデンティティも岩手県に近いという認識があるようだ。

青森県西部は津軽地域であり、そこで行われる方言を津軽方言と呼ぶ。津軽地域のかつての中心は弘前城のある弘前市であるが、県都の青森市も津軽方言地域である。もちろん、青森市と弘前市においても言語的変異は観察されるが、それはおおむね一方言の内部における変異と見なされる。津軽方言と南部方言は、わかりやすいいくつかの違いを除けば、客観的に見て非常に近いと思われるものの、中世末以来の対立の歴史を背景に、言語的アイデンティティを異にしている。佐藤和之ほか.2003. では、自方言に肯定的な津軽方言話者と対照的に、南部方言話者は自方言に対してかなり否定的であり、言語的な自己認識も大きく異なるようである。ただし、津軽方言と南部方言は、東北方言内部の他の方言と比べても相対的に近い方言であると評価でき、当該方言の話者たちは実際の差異を過大に評価している（現実にはあまり違わないが、違うと思いたい、違うと認識することでアイデンティティの違いを確認したいということ）と見るべきであろう。

ここでデータを検討する八戸市の方言は、上に述べた「南部方言」の中核

的な方言と見ることができる。「最広義の南部方言(A)」は、青森県の東半分と岩手県中北部に秋田県の一部を加えた地域に行われているものと言うことができるが、一般に、「南部方言」ないし「南部弁」という規定は青森県内で「津軽方言」ないし「津軽弁」と対比されて捉えられるものでしかない。「津軽方言²」がいわば単独で規定できるのに対して、「南部方言」は「青森県において津軽方言でないもの」といった消極的規定しかできない、と言ってもよい。



² 以下、「弁」は用いず「方言」で統一する。

これは、東北方言のなかでも津軽方言が筆頭の知名度を誇るのに対して、南部方言は知名度が低いという結果にも反映していると言えるだろう。

さて、佐藤ほか.2003.などを参考に、おおまかな地域区分を地図上に表すと前ページのようになる³。

狭義の「南部方言(B)」は、黒く塗りつぶした八戸市の西と北に広がる青森県内の旧八戸藩地域とおおむね重なる。青森市と八甲田連峰を含む青森県の西側は津軽方言の地域である。旧南部藩地域ということで、下北半島まで南部方言に含めることもあるが、これは近年下北方言として切り離して独立させるのが一般的である。地図上塗りつぶしていない野辺^の町^じは、津軽方言と南部方言の連続的な境界域とされ、下北方言との境界域でもある。旧南部藩に含まれることから、南部方言域とされることが多いが、ここでは、境界域と見なしている。なお、岩手県方言の区分では、旧南部藩（盛岡藩）の地域の方言（前掲地図では「南部方言（岩手県）」となっている）は「中北方言」と呼ばれ、旧伊達藩の地域を「南部方言」と呼ぶことが行われている。岩手県内の旧伊達藩地域の方言は、一般的な地域区分での「南部」の方言であり、「岩手県南部」の方言として「南部方言(C)」と呼ばれるわけであるが、紛らわしいのは「最広義の南部方言(A)」にも「(岩手南部の)南部方言(C)」は含まれないということであり、むしろ「南部方言(A)」は、岩手県方言のうち「南部方言(C)」を取り除いた地域の方言を「南部方言(B)」に加えたもの⁴、と規定することになる点であろう。なお、以下のデータは、正確を期すならば、八戸市方言とでも言うべきものであるが、多くの地域方言がそうであるように、地理的に見ても社会的に見ても八戸市方言内部にも変異がある。しかし、本論で扱うモダリティ辞は南部方言(B)の内部ではそれほど大きな差異はないものと考えられ、南部方言(A)と津軽方言を含む「北奥方言」⁵においても共通性

³ フリーソフト Kenmap8 (ver.8.32) (福山大学・亀井氏作) を利用して筆者が作成したものの。

⁴ 厳密には、旧南部藩であった秋田県の鹿角町なども加えることになる。

⁵ 「北東北方言」「東北北方言」「北奥羽方言」などと言っても実質的に同じである。ただし、個々の研究者によりそれが想定する地域は異なる。

が高いと考えられる。

以下で、「南部方言」というときは「南部方言(B)」の意であることをあらかじめお断りしておく。データは、断続的に八戸市出身で母方言話者と認められる方(中高年層を中心とする)の協力を得て収集した。判断や用法にデータ上のばらつきがなかったわけではないが、重大なものはなく、本論では筆者の責任において統合したデータとして示している⁶。また、本論は、社会言語学的に変異を記述したり分析したりするものではなく、ラングとしての体系の記述と分析を行うものであるので、特に判断の微妙さが問題にならない限りは言及しない。

また、論題を「北奥方言」としたのは、モダリティ辞を扱う限り、枠組みとしては北奥方言内部でおおむね共通していると考えられることから、「南部方言」という言い方で混乱を招くことを回避すべきだと考えたためでもある。

3. モダリティ辞の記述

本論で取り上げるモダリティ辞は、以下のようなものである⁷。これらは、いわゆる命題のモダリティとされるカテゴリーに属するものであり、これ以外にも伝達のモダリティに属する終助詞(文末詞)が多く存在する。

- ・「べ」
- ・「ゴッタ」
- ・「ヨッタ」「ミッタ」「ソッタ」
- ・「ズ」

以下、3.2から3.5では、これらを順次記述的に分析していくが、その前に

⁶ 八戸市には筆者も居住歴があり、父親の生育地でもあるが、筆者自身は正確な内省が利く方言ではないので、主に収集データをもとにまとめている。

⁷ 以下では特に断りのない限り、標準語をひらがな書きし、北奥(八戸)方言をカタカナ書きする。ここでいう標準語とは東京方言の規範態ほどの意味である。

3.1 で述部複合のあり方に言及しておく。

3.1 述部複合の基本形式

日本語の述部複合は、おおよそ動詞＋使動辞＋受動辞＋否定辞＋時制辞の順序で現れるが、アスペクト辞「ている」は加藤.2007. に言う《弱境界》を含むため、否定辞の前を無標の位置とするものの、他の要素に比べて位置が厳格に指定されていない。ただし、無標の位置では、(3)のように受動辞が受動の意に解されるものが、(4)(5)のように受動ではなく、可能の意の解釈に傾く。

- | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|------|-----|
| (1) | 食べ- | させ- | られ- | なかっ- | た |
| | 動詞 | 使動辞 | 受動辞 | 否定辞 | 時制辞 |
| (2) | 食べ- | サセ- | ラレ- | ネガッ- | タ |
| | 動詞 | 使動辞 | 受動辞 | 否定辞 | 時制辞 |

標準語「ている」の対応形は「テラ」（ただし、語中の/t/は有声化するため、多くは「デラ」として実現する）である。

- (3) 食べ-させ-られ-てい-なかつ-た
- (4) 食べ-させ-てい-られ-なかつ-た
- (5) 食べ-てい-させ-られ-なかつ-た
- (6) 食べ-ない-でいる

「食べている」の対応形は「食べデラ」であるが、「食べていない」「食べていなかった」の対応形は「食べデイネ」「食べデイネガッタ」である⁸。(3)-(6)

⁸ 「ネ」は「ネー」と長母音で実現することもあるが、シラビーム的色彩が強いため、文体的対立以外の差はないようだ。文体的には、「ネー」が東京方言俗調での「ない」の母音融合形に近いせいか、「ネ」に比べてやや高いようである。

に対応する形は、(7)-(10)である。

- (7) 食べ-サセ-ラレ-デイ-ネガツ-タ
- (8) 食べ-サセ-デイ-ラレ-ネガツ-タ
- (9) 食べ-デイ-サセ-ラレ-ネガツ-タ
- (10) 食べ-ネ-デラ⁹

アスペクト辞「テラ」は形容詞や形容動詞にも後接し、名詞述語文でも使われる。

- (11) 具合が悪クテラ¹⁰
- (12) コノ部屋、アツタゲーナ。(この部屋、暖かいな)
- (13) コノ部屋、アツタガクテラナ。(この部屋、まだ暖かいな)
- (14) アノ選手ガ一位ダ。(あの選手が一位だ。結果が確定した。)
- (15) アノ選手が一位デラ。(あの選手がいまのところ一位だ。競争の途中で、結果は確定していない。)
- (16) ソゴノ家ハ立派ダ。(その家は立派だ)
- (17) ソゴノ花壇ダバ、イロツタ花ツコ植エサツテデ、マツテ立派デラ。
(その花壇なら、いろんな花が植えてあって、今のところずいぶん立派な状態だ)

東京方言では、「元気だ」に対して俗用で「元気にしている」のように言うことはあるが、「走る」と「走っている」との対立に見られるような意味の違

⁹ 「V-ネデラ」以外に「V-ナクテラ」の形もある。「一緒に食事をしようと思って、食べずに待っていた」の意であれば前者を使い、「食べネデラ」と言うのに対して、「えさをいくらあげても、この金魚はえさを食べないままだ」の意であれば後者を使って、「食べナクテラ」と言う。

¹⁰ このときは、「悪くてら」の/k/も/t/も有声化しないのが普通だが、「悪グテラ」となることはある。ただし、両方有声化して「悪グデラ」とはならない。

いは、形容詞・形容動詞・名詞述語には生じない。そもそも、標準語では、動作性のない動詞（金田一.1950. に言う「状態動詞」）では、「ている」をつけることは原則としてしないが、形容詞・形容動詞・名詞述語の場合は、述部が動作性を持たないので、「ている」をつけることはできない。これらは連用テ形にはできるので、形態論上はそれに「いる」を後接させることが考えられるが、それは意味統語論的に許されない。

ただし、動作性のある動詞には標準語でも「ている」は付く。この種の研究はたくさんあるので先行研究の成果にゆずるが、金田一.1950. では、「ある」「いる」のような存在を意味する動詞のほかに、「見える」「聞こえる」や「話せる」「行ける」などの可能動詞形も「ている」を後接させられないとしている。確かに標準語では「*いている」「*あっている」は形態統語論的に不適格であるが¹¹、近年、東京方言でも、「見えている」「聞こえている」はごく普通に使われており、若年層に多く俗用と見ることのできるものの、「話せている」「行けている」なども聞かれる。

- (18) あの展望台から富士山が見えます。
- (19) 今日は霧が濃いので、富士山が見えません。
- (20) いま、一時的に霧が晴れて、ちょっとだけ、富士山の頂上が見えています。
- (21) 太郎は、その事件のいきさつについて、ちゃんと説明{でき/*できてい}ます。これから先方に説明のために向かいます。
- (22) 太郎は、その事件のいきさつについて、いまのところ、ちゃんと説明{*でき/できてい}ます。先方の皆さんからもまだ苦情は出ていません。
- (23) 僕は将来野球選手になろうと {思います/思っています}。

¹¹ 可能な方言はある。「いて(い)る」は近畿方言では可能な形態であり、「あっている」は九州方言などでは「ある」と対立し、可能な形態である。

「見える」や可能動詞の場合、テイル形は、一時的状態であることを明示した有標型と見ることができる。(20)は「見えます」(非テイル形)でも成立するが、これは一時性を顕示しない無標の形式でもよいからである。(21)のように能力属性という、普通は時間的に限定されないものを示すなら、可能動詞を無標で使う。テイル形で一時的状態として表すことは許されない。しかし、(22)のように、可能動詞で一時的状態、特に、個別事象としての達成状況を含む一時的状態として述べる場合は、テイル形にするのが望ましく、無時間的な属性となる可能動詞の非テイル形は不適切になる。また、(23)のように「思う」について一時的状態を有標として標示することは、その判断が不確定で変更の余地があるという推意(implicature)を生じる。(23)では「思います」も「思っています」も大差ないように見えるが、後者は、今のところそのように思っているだけで、変わる可能性があることが推意される。このため、気象予報士がテレビなどで天気を予報する際に、「明日は寒くなると思いますよ」とは言えるものの、「明日は寒くなると思っていますよ」というのは不適切でひどく不自然である。しかし、気象予報士どうしが論争しているときなら、「あなたは寒くならないと言うが、私は明日は寒くなると思っていますよ」のように言うことは可能である。これは推意が適切性に反映したものである。

以上、標準語におけるテイル形が状態性述語について一時性を標示する有標の用法を詳しく述べた。南部方言を始め北奥方言で、形容詞・形容動詞を典型とする状態性述部にテイル形が可能なのは、属性や状態といった本来無時間的な表現を有標化して一時的な状態として示し、時間的な表現にすることに制約がかからないからである。

- (24) ^{サッキ}先刻マデ 温カク テラ ッタ ドモ、
 さっきまで Adj.用 Asp. Past 逆接

「さっきまで一時的に温かい状態だったが、」

ハー 冷メ デラ。

もう V.用 Asp.

「もう冷めている」

上の例文前半の従属節では、アスペクト標示を行うことで「一時的に温かい状態」であることを示しているが、それは同時にその状態に永続性がなくいずれ失われるという見込みが推意され (implicated) る。後半主節部は、動詞を用いて「冷メデラ」のようにしているので標準語の「冷めている」と等価である。これの代わりに、「冷タクテラ」のように形容詞を用いてアスペクト標示を行う場合には、「冷たい」状態が一時的に永続しないと見込まれるという判断が必要になる。

一時的な状態ということは、現実態 (realis) として述べる個別事態だということであり、伝聞など間接的に取得した情報でないのなら、判断の根拠が外在的に認知されていなければならない、ということでもある。

- (25) A 「あの街は、冬になるとずいぶん寒いんじゃないか」
B 「すごく寒いよ」
- (26) A (外から戻ってきたばかりのBに) 「今日はだいたい冷え込んでいるらしいね」
B 「すごく寒いよ」

標準語では、形容詞にアスペクト辞「ている」はつけられないので、一般論で「寒い」という気候上の特性を述べる(25)と、現実態として判断根拠を持って述べる(26)とに形式上の対立はない。しかし、南部方言の場合、形式上の対立に基づいて表し分けられる。

- (27) A 「あの街は、冬になるとずいぶん寒いんじゃないか」
B 「スゴグ寒イジャ」
- (28) A (外から戻ってきたばかりのBに) 「今日はだいたい冷え込んでいるらしいね」
B 「スゴグ寒クテラジャ」

現実態として述べるのは直接取得した情報を根拠に取得した場合である

が、一時性も含めた判断全体を間接的に伝聞によって取得した場合や発話者が推論した内容であれば、その標示を行うことで形容詞+アスペクト辞を使うことが可能になる。

- (29) スゴグ寒クテラズ (いまのところすごく寒いそうだ)
 (30) スゴグ寒クテラゴッタ (いまのところすごく寒いようだ)

しかし、「かもしれない」に相当する「ガモスレネ」は、外在の根拠を認識した上での判断（証拠性判断 (evidential)）ではないため適切にならない。

- (31) ??? スゴグ寒クテラガモスレネ。

形容詞+アスペクト辞の使用要件といったことを明確にする上でも、後続部に現れるモダリティ辞の記述は重要である。

また、面白いのは、「ていない」にあたるアスペクト否定形が存在し、「マダ冷メデネ」(=まだ冷めていない)と動詞には使えるのに、形容詞の場合は、「*冷タクテネ」¹²のように形容詞+アスペクト+否定が不適格なことである。もしも「冷たくない」という状態が一時的と見なせるのであれば、「冷メタクナクテラ」という形は可能である。動詞の場合は、「食べないでいる」に対応する「食べネデラ」は可能であるが、形容詞の場合も北奥方言では否定+アスペクト辞の形で使うことができるのである。整理しておく¹³。

結局、標準語ではそもそも形容詞にアスペクト辞が後接する用言複合自体が制限されているのに対し、南部方言では形容詞にアスペクト辞が後接する用言複合体が可能であって、制限がない、とまとめることができる。形容詞にアスペクト辞がついてそれに否定辞がつく用言複合が成立しないのは、形

¹² 標準語の形式で逐次置換を行うと、「*冷たくていない」となる。(ここでの*は、非文をマークしていると考えてもよいが、むしろ架空形の意で使っている。)

¹³ 表中で、○は対応する形式があるもの、×はないものを表す。動詞「食べる」、形容詞「温かい」を使って例を示す。()は、不適格形だが、参考のために掲げている。

構成	南部方言形	標準語形
V+ Asp.	○食べデラ	○食べている
A+ Asp.	○温カクテラ	×(温かくている)
V+ Asp.+ Neg.	○食べデネ	○食べていない
A+ Asp.+ Neg.	×(温カクテネ)	×(温かくていない)
V+ Neg.+ Asp.	○食べネデラ	○食べないでいる
A+ Neg.+ Asp.	○カクナクテラ	×(温かくなっていない)
V+ Asp.+ Pst.	○食べデラッタ	○食べていた
A+ Asp.+ Pst.	○温カクテラッタ	×(温かっていた)
V+ Neg.+ Asp.+ Pst.	○食べネデラッタ	○食べないでいた
A+ Neg.+ Asp.+ Pst.	○温カクナクテラッタ	×(温かくなっていた)

態論的に不適格なのではなくて、一時的状態にないことは、そもそもその状態にないことに含まれる状況であって、(例えば「一時的に温かくないという状態」は「温かくない状態」と同じと見てよい)、表現上有標になる形式が無標の表現形式に対してより付加的で複雑な意味を担うという Horn.1982. の考え方を適用すれば、意味的に特立せず包摂されるのに表現だけ有標になることが許されないと説明することができる。語用論的な MORP (修正オッカムの剃刀原理; Modified Ockham's Razor Principle) によって意味的に成立しなくなると見るべきだろう。

以下では、各モダリティ辞の形態・統語特性・意味用法などについて順に述べていく。

3.2 「べ」

古典語の助動詞「べし」の後継にあたる「べ」は、東日本の広い範囲に分布している。南部方言では「べ」はこの形態のみで用いられ、南奥方言のように「ツペ」などの形態にはならない。

古典語「べし」の標準語における後継は「べきだ」であるが、これは加藤重広.2006. のように複合助動詞として認めることができる。まず比較のために古典語「べし」の活用を挙げるが、命令形は古典語も現代標準語も持たないとされるので除外しておく。「べし」の活用は、形容詞型を基本とするが、

それが現れるのは連用・終止・連体の場合のみで、終止形以外では、古典語の形容詞同様に連用形「べく」に存在詞「あり」が複合したカリ活用を用いる。このため、連用と連体では、形容詞型とカリ活用の2つの形態が併存することになる。

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形
べから	べく べかり	べし	べき べかる	べけれ

一方、現代標準語の「べきだ」は、以下のようになる。連体形はそのまま継承されているが、連用形「べく」も残存的に特定の文体的特徴を持って用いられている。重要なのは、連体形「べき」に軽動詞「だ」が付き、「だ」の活用を以てすべての活用形が成立していることである。「べく」は残存形である以外に、「べきで」が加藤重広.2003. で言う《非修飾》、すなわち並列で用いる連用形となるのに対して、《修飾》、すなわち副詞的成分となる場合には「べく」を用いる、という対立もある。軽動詞などが続く場合は、「べきである」のように、「べきで」を用いる。

未然形	連用形	終止形	連体形	假定形
べきで	べきで べく	べきだ	べき べきな	べきなら

三系列の活用が重なっているのは連用形をのぞけば連体形だけであるが、「べきな」は準体助詞「の」（「の」を含む複合的接続助詞も同様）に続く場合に限られ、通常の名詞に続く場合は、「べき」を用いる。つまり、「考えるべきことは」に対して「考えるべきなのは」のようになる。ただし、近年、「考えるべきなこと」のような使用が見られる。まだ正用とは認めがたいが、今後普及すると追認せざるを得ない時が来るかもしれない。

さて、これに対して、南方方言の「べ」は、活用を失っている。また、標

準語「べきだ」に相当する形式「ベギダ」も存在しており、「ベ」は南部方言では別の語であるため、「…スルベギダベ」のように重ねて使うことが可能である。もしも、「ベ」が活用を失っているのであれば、既に助動詞ではなく終助詞ないし文末詞と見るべきである。先ずこの点から確認する。

- (32) 太郎ハ多分来ルベ。(太郎は多分来るだろう)
 (33) 太郎ハ多分来ルゴッタ。(太郎は多分来るだろう)

「ベ」を終止形で用いたのが(32)であるが、単純な推量を示す際には(33)のように「ゴッタ」(あとで詳しく扱う)を使うのが自然で、(32)は自然とは言えないが、ただ、不適切というわけでもない。あとで述べるように、「ベ」は下降調の「行グベ」で「行こう」という勧誘に用いるか、上昇調で「行グベ？」と用いて「行くだろう？」という確認要求に用いるのが一般的であり、単純な推量用法は衰退の局面にあると考えられるが、全くなくなったわけではない。ここでは、活用形の確認をする必要上、発話行為性があると例文が不統一になるので、(32)を基本形として用いる。

- (34) *太郎ハ多分来ルベネ。(ベ+否定辞)
 (35) *太郎ハ多分来ルベデ、…(ベ+接続助詞テ)
 (36) *太郎ガ多分来ルベタ(ベ+時制辞タ)
 (37) *太郎ガ来ルベバ、…(ベ+条件接続助詞)
 (38) *多分来ルベ人(ベ+名詞)

否定辞に続く形は活用形があるのなら未然形となるが、(34)のように、成立しない。連用形は、連用中止形も、接続助詞に続く形(35)も成立せず、時制辞の「タ」も後接させられない。つまり、テンス分化が見られない。また、(37)に見るように「バ」に続ける仮定形も成立しない。名詞に続く連体形として認められるかという点についても、(37)に見るように成立しない。活用形ごとに確認しても、いわゆる終止形にあたる形でしか用いず、活用を喪失してい

る。従って、助動詞ではなく、助詞に分類することになる。以下に見るように、連体形を認める余地はあるが、ここでは以上の観察をもとに助詞と見なすことにする。

「べ」は推量にも用いることもあり、標準語の「だろう」に比定されうる。「だろう」もテンス分化はなく、未然・連用・假定・命令の各活用はないが、連体修飾は、あまり多く見られず、それほど自然とも言えないが、可能であると認められる。例えば、(39)は成立する。

(39) 多分来るだろう人

これは「だろう」より「であろう」のほうが受容度が高いということはあるが、成立するので「だろう」には終止形と連体形があり、形態は同一で分化がないものの、国文法で言う助動詞の定義には合致することになる。しかし、「べ」は(38)に見たように連体修飾にも使えない。(39)に相当する意味は、次に取り上げる「ゴッタ」を用い、「多分来ルゴッタ人」のように言うことができるが、これも「だろう」と同じように、それほど自然ではない。ただ、(40)のように言うことは可能なようである。

(40) キット来ルベモ (きつと来るだろうもの)

ここで「べ」のあとに現れる「モ」は、「モー」「モノ」「モン」などの変異も見られ、形式名詞の「もの」に由来すると考えられるが、「だって、すごくおいしいんだもの」などと標準語で用いる「もの」¹⁴と同じ用法であり、ここではこの「モ」も終助詞と見ることにしたい。従って、「べ」は、活用がなく、文末詞ないしは終助詞に分類されると考える。ただし、(40)を連体形の名残と

¹⁴ 俗調では「だって、知らないもん」のように「もん」になる。南部方言では「モン」の変異形はあるが、「モンナ」「モンネ」のように使う時に聞かれる程度である。ただし、これらも「モナ」「モネ」のようになるのが普通である。

見ることは可能だろう。

「モ」以外にも「ベ」のあとに現れる助詞がある。

- (41) 行グベナ (行こうな／行くだろうな)・行グベヨ (行こうよ／行くだろうよ)・行グベネ(行こうね／行くだろうね)・行グベガ(行くだろうか)
- (42) 行グベドモ (行くだろうけれど)
- (43) *行グベスケ (行くだろうから)

(41)に見るように、「ナ・ヨ・ネ」を後接させるときは「ベ」は勧誘もしくは推量の意味になるが、「カ」の場合は推量にしかならない。(42)の逆接の「ドモ」に続く場合も、推量の意であるが、(43)に見るように理由接続の「スケ」¹⁵に続けるのは不自然なようである。北海道方言などでは「ベサ」のように「サ」が続く形も聞かれるが、南部方言では「ベ」に「サ」を続けない。

「ベ」の意味用法としては、①勧誘、②確認要求、③推量が考えられるが、古典語「べし」にあるような義務の意味はない。

- (44) オ前モ一緒二行グベ。〔①勧誘〕お前も一緒に行こうよ¹⁶)
- (45) オ前モ一緒二行グベ?〔②確認要求〕お前も一緒に行くだろう?)
- (46) 誰ダッテ行グベ。〔③推量〕誰だって行くだろう)

¹⁵ この「スケ」は、近畿方言などの「サカイ」「サケ」と同一起源と思われる。

¹⁶ 「一緒に行こう」の意では「アベ」(前鼻音化を伴い、[a^mbe] のようになることもある)という形式があるので、(44)は「オ前モアベ」とするほうが、より自然である。これは、古典語の動詞「合ふ」の「連れ立つ・一緒になる」ほどの意を命令形「合へ」の対応形が前鼻音化などの影響で「アベ」と転じたものであろう。「アベ」は単に「行け」の意ではないので、「お前が行け」の意味で「オ前ガアベ」とは言わず、一緒に行く場合にのみ用いることから、命令形の「合へ」のみ残存したのだと考えられる。標準語の「おいで」も「出づ」の連用形に「お」がついた形(「ませ」などの後続部が脱落したのかもしれない)のみが残存しているものであり、移動行為の命令や勧誘など、場面的に特定表現のみの頻度が高いとこのような残存が生じる一般的な現象と言えるだろう。

確認要求の用法では文末は上昇調になる。勧誘と推量は上昇せず、同じような文音調となる。

勧誘は、動詞原形に「べ」が付く形でしか実現されない。②③は、命題内容についての同意ないし推量なので、以下のように、動詞以外の述語形でも、否定文などでも後接しうる。

- (47) 行ッタバ (時制辞+ベ)・行ッテラベ (アスペクト辞+ベ) 行ガネベ (否定辞+ベ)・暑イベ (形容詞+ベ)・静ガダベ (形容動詞+ベ)・学生ダベ (名詞述語+ベ)

しかし、モダリティ辞の場合は後接できるものとできないものがある。

- (48) 学生ナンダベ (のだ+ベ)
(49) 学生ガモシレネベ (かもしれない+ベ)
(50) 学生デネバナネベ (でなければならない+ベ)
(51) *学生ダゴッタベ (ゴッタ+ベ)
(52) 学生ダズベ (ズ+ベ)
(53) *学生ダッキャベ (キャ+ベ)

(48)–(50)に見るように「のだ」「かもしれない」「でなければならない」に相当する方言形には「べ」は後接できる。これらは、形式上は「だ」という軽動詞で終わるか、「ない」(→ネ)という否定辞で終わっており、形態論的に同じ原理が働いていると見ることができる。例えば、軽動詞「ダ」で終わる「ものだ」(→モノダ・モンダ)、「はずだ」(→ハズダ)、「ようだ」(→ヨッタ)、「みただ」(→ミテエダ)、「べきだ」(→ベギダ)、「つもりだ」(→ツモリダ)、「わけだ」(→ワゲダ)などにも「べ」は後接可能である。

後接できないものは、(51)のように推量を表す「ゴッタ」である。標準語「らしい」「まい」は、本来的な南部方言ではあまり使わないようであるが、標準語よりの上位話体で用いる場合でも、「ラシイベ」「マイベ」とは用いない。

ほかに、加藤.2006. で挙げるモダリティ助動詞のうち、「行こう」の「う」（意志助動詞）には後接しない。

モダリティ助動詞も含めて、動詞原形以外の述部に後接する場合は、②確認要求か③推量であり、それは上昇調かそうでないかという文音調で区別される。

3.3 「ゴッタ」

「ゴッタ」は命題に付き、推量を表す。

- (54) 太郎ハ明日学校サ行グゴッタ。(太郎は明日学校に行くだろう)
- (55) コノ計算, 間違ッテラゴッタ。(この計算間違っているようだ)

前節に述べたように、「ゴッタ」は「ベ」と共起しないが、「ヨッタ」とも共起しない。標準語「ようだ」の対応形「ヨッタ」も推量の意味合いで使えるので、(55)は、「コノ計算, 間違ッテラベ」あるいは「コノ計算, 間違ッテラヨッタ」としても近い意味になる。また、「ゴッタ」に確認要求の用法はない。「～ゴッタ？」は、聞き逃した時などおうむ返して尋ねる際に使うことしかなく、疑問の終助詞「ガ」を付して「～ゴッタガ？」とは用いない。これらについては、「ベ」と「ゴッタ」が用法上相補的な分布を見せている。

一方で、「ベ」同様にテンス分化が見られないという特徴も「ゴッタ」には見られる。「ヨッタッタ」とテンス分化が見られる「ヨッタ」とは対照的に、「ゴッタッタ」とは用いない。

	確認要求	疑問	タ形
ベ	○ (～ベ?)	○ (～ベガ?)	×
ゴッタ	×	×	×

推量用法で「ゴッタ」が「ベ」と異なるのは、推断の弱さであり、命題成立の可能性が高いことを述べているに過ぎない点である。

- (56) 「明日、あなたは何時に起きるの?」と聞かれて)「六時ニ起ギル
{ゴッタ/*ベ/*ヨッタ}」(六時に起きるだろう)
- (57) (誰が次の町内会長をやるか相談していて)「ンダバ、俺ガヤル
{*ゴッタ/ベ/*ヨッタ}」。(それなら、俺がやるよ)
- (58) 「モシガシタラ当ダラネガモシレネドモ、明日ハ晴レル{ゴッタ/
*ベ/?ヨッタ}」。(もしかしたら当たらないかもしれないけど、明
日は晴れるだろう)
- (59) (太郎が約束の時間に姿を現さないので来ないのではないかと心
配している友人に対して言う)「イヤ、来ル(ベ/ゴッタ/*ヨッ
タ)」

自己意志で制御しにくい事態を予想するような場合には(56)のように「ゴッタ」しか使えない。しかし、その場での決断や意志決定であれば(57)のように「ベ」を用い、「ゴッタ」は使わない。(56)も、その場での意志決定として、「それじゃ六時に起きることにするよ」と決断したのなら、「六時ニ起ギルベ」とすることになる。これは、外れるかもしれない予想を述べる際に「ゴッタ」が適切で、「ベ」が不適格になることも一致している。(59)では「ベ」も「ゴッタ」も可能だが、「ゴッタ」が「来るだろう」という一般的な予想・推量を述べているのに対して、「ベ」は反論して「来るよ」と強く推断する意味になる。

また、タ形がないことから分かるように、発話時における話者の推量をマークするのが「ゴッタ」である。「翌日は晴れるだろうと思った」の「だろう」と同様、「翌日ハ晴レルゴッタド思ッタ」のように思考動詞などを使って従属節化しなければ過去の推量であることは示せない。話者以外の推量の場合も同じである。

3.4 「ヨッタ」「ミッタ」

「ヨッタ」は標準語「ようだ」に対応する形であり、用法も「ようだ」とほぼ共通している。

- (60) (太郎が大学院に進学するつもりであることを誰かから聞き、それを別の人物に言う)「太郎ハ大学院サ進学スルヨッタ」
- (61) (窓外に傘を差して歩く人の姿を認めて)「サッキマデ天気イガッタノニ、ハー¹⁷、雨降ッテラヨッタ」(サッキマデ天気がよかったのに、もう、雨が降っているようだ)
- (62) マッテ¹⁸ 責メラレデラヨッタ。(まるで責められているようだ)

「ようだ」は、命題内容の認識を支える根拠が外在的に存在していることを示すもので、いわゆる証拠性の判断にあたる。根拠は、他者が既に獲得済みの情報を共有した結果得られるもの、いわゆる《伝聞》であってもよいが、発話者が直接認知した根拠事象であってもよい(加藤2006.)。ここでは、前者を間接的証拠性または伝聞と、後者を直接的証拠性と呼ぶ。(60)は伝聞(間接的証拠性)、(61)は直接的証拠性の例である。このほかに、標準語の「ようだ」同様に、同一ではないものの強い類似性があることを意味する(62)のような用法もある。

標準語「ようだ」と同じように、活用があり、テンス分化も見られる。活用の形式は、軽動詞「だ」の活用とほぼ同じであるが、一定の制約もある。

- (63) 雨降ッテラヨツテネ (雨が降っているようでない)
- (64) 雨降ッテネヨッタ (雨が降っていないようだ)

対応する標準語の文からも分かるように、(64)のほうが自然であり、「雨が降っていない」という判断の根拠が外的に認知されているという意味が明確である。一方、(63)は「降っているようだ」という判断が成立するだけの証拠性が十分でないという意味合いのようありながら、語用論的には「従って、

¹⁷「ハー」は標準古典語「早や」の転訛で「もう」の意のアスペクト副詞と考えられる。

¹⁸「マッテ」は「まるで」の転訛とも考えられるが、「まるで」に相当する以外に、「マッテ眠イ」のように「どうしようもなく」に近い強調副詞としても用いる。

おそらく降っていないのだろう」という解釈が引き出され、明確に両者が対立しない関係にある。

時制辞は「ヨッタ」そのものにも付くが、前接する命題そのものにも付く。加藤重広.2007. という《多重テンス》が形態上見られるわけであるが、これは標準語の「ようだ」でもまったく事情は変わらない。

- (65) 雨降ッテラヨッタッタ (雨が降っているようだった)
- (66) 雨降ッテラッタヨッタ (雨が降っていたようだ)
- (67) 雨降ッテラッタヨッタッタ (雨が降っていたようだった)

原則的には、命題の時制辞は事象のテンスを、「ヨッタ」の時制辞は判断のテンスを示すはずであるが、降雨の証拠性判断が過去であれば、降雨は同じ時点でなければ、証拠性判断ではなく未来の予想になってしまう。結局、(65)は《事象時＝判断時》が過去であると考えざるを得ない。(66)は《事象時》が過去であり、《判断時》が現在である。(67)は命題に付く時制辞が《事象》の過去を、「ヨッタ」の時制辞が《判断時》の過去をそれぞれ独立していることになるが、結局全体としては《事象時＝判断時》ということであるから(65)とほとんど変わらない解釈になる。そして、過去における判断が現在も有効であれば、いずれを発話として選択することも可能であり、上の3つは実質的に明確な違いがないことになる。

ここまで観察したことはおおむね標準語「ようだ」に共通してあてはまることである。しかし、標準語とは異なると思われる点もある。

- (68) 太郎は学校に行ったようだ。
- (69) ?太郎は学校に行ったようか？

標準語「ようだ」の疑問形は「ようか」が考えられるが、(69)に見るようにこれは不適格とは言えないものの、受容度が高いとも言いがたい¹⁹。「行ったようですか」ならもう少し受容度が上がり、それほど不自然とは感じない。

しかし、南部方言では、疑問形がそれほど不自然でないようである。

(70) 太郎ハ学校サ行ッタヨッタガ？

「ヨッタ」は同じ認識系のモダリティに関わる「ゴッタ」とは共起しない。

(71) *行ッタヨッタゴッタ

(72) *行ッタゴッタヨッタ

しかし、確認要求の「ベ」を後接することはできる。

(73) 行ッタヨッタベ？（行ったようだろう？）

未然形は否定に続く形「ヨッテ」、連用形はタ形の際に現れる「ヨッタツ」と認めることができるが、連用中止の「ヨッテ」もあるが、連用テ形に当たる形は「ヨッテデ」となる。連体形は「合格スルヨッタ学生」「合格シタヨッタ学生」のようになるが、これは文脈に依らなければ、直接証拠性なのか間接証拠性なのか強い類似性なのか判断できない。仮定形は「ヨッタラ」となるが「ヨッタラバ」とは用いないようだ。命令形はない。

「ヨッタ」とよく似ているものに、標準語「みたいだ」に対応する「ミッタ」がある。活用形態は「ヨッタ」と同じである。これに加えて、標準語「そうだ」に対応する「ソッタ」があるが、これは動詞の連用形に付き、「行ギソッタ」「合格シソッタ」のように使うか、形容詞や形容動詞の語幹に付き、「不味ソッタ」「高ソッタ」「立派ソッタ」のように用いるもので、終止形ないしは命題について伝聞を表す用法（標準語では「行くそうだ」「合格したそうだ」

¹⁹ 使用者のレジスターに偏りが考えられ、「行ったようか」「行ったようだね」は男性が多く用いるような文体であり、一方「行ったようね」は女性的な文体と言えらる。ただし、これは「だ」に関わる文体性の問題であり、他の助動詞でも観察される。

「不味いそうだ」などに相当する形は、標準語的な高位文体でしか使わない。これに代わって一般的に伝聞を表す「ズ」を用いる。

3.5 「ズ」「テラ」

標準語でも伝聞を表す形式は多様である。助動詞としては「そうだ」「らしい」があるが、それ以外に助詞に分類できる「って」があり、「ということだ」「という話だ」のように「という」が介在する形式でも伝聞を表せる。しかも「という」を「って」に置き換えて「ってことだ」「って話だ」ということも可能であり、「って」は俗調では「つー」「ちゅう」「てな」などになることもある。

南部方言の「ズ」は、この方言が少なくとも摩擦 [z] と破擦 [dz] の対立を持たない方言²⁰なのでこのように記しているが、語源を踏まえてわかりやすく書くなら「ヅ」とすべきだと思われる。東京方言でも「っていう」に当たる形式が転訛して「つつー」になり²¹、「行くという話」の意味で「行くっていう話」というとき、俗調で「行くつつー話」となることがある。なお、「と」が「って」に転訛したとは考えにくく、機能的同一性を背景に範列関係上置換されたものと考えるべきであるが、この点は本論に直接関わらないのでここでは詳しく論じない。ただし、「行くつつー話」も「行くつつー話」もあり、前者が後者の促音脱落（モーラ喪失）と見られることは、「という」ではなく「っていう」からの転訛を考えるべき根拠にはなる。これが南部方言では「行グズ話」となるところを見ると、「つつー」に対応するものが「ヅ」で

²⁰ これは標準語でも同じであり、この点だけをとれば「二つ仮名方言」ということになる。東北方言では中舌方言が見られ、標準語の [i] と [ɯ] が [i] に収斂して対立を喪失していると考えられる場合もある。全面的に「イ」と「ウ」の中和が起きていれば、「じ・ぢ・ず・づ」は区別されないことになり、「一つ仮名方言」に分類できる。本論は、音声・音韻を論じるものではないので、この点は、詳しく論じないが、単純に一つ仮名方言に分類するべきとも思われない現象が見られるので、二つ仮名方言に暫定的に分類しておく。

²¹ /Qteiu/→/Qteju:/→/Qtsu:/のような変化を想定する。

実現したと考えるのが自然である。東北方言では広く語中の/k/や/t/に有声化が見られるが、有声化すると直前に促音節/Q/が立たないのが原則である。また、北奥方言は少なくとも部分的にシラビーム方言の特徴が見られ、2モーラの長母音や母音連続が1モーラになることはよく生じる²²。従って、「っつー」が「ヅ」で実現することは説明がつく。以下では、「ズ」と表記する。

この「ズ」は「ようだ」「らしい」とは異なり、間接証拠性（伝聞）しか表さない。命題に後接する。

- (74) 太郎が大学院サ進学スルズ。(太郎が大学院に進学するそうだ)
 (75) 明日ハ雨ダズ。(明日は雨だそうだ)

「ズ」の前は、否定辞・時制辞・アスペクト辞などが現れてもよい。また、モダリティ辞の「ゴッタ・ヨッタ・ミッタ」が前に現れてもよい。しかし、これらは「ズ」の直後に現れることはできない。以下の例では（ ）内に標準語の対応訳をあげているが、逐次対応で示すため、標準語としては不自然な形も含まれている。

- (76) シネズ (しないそうだ)・シタズ (したそうだ)・シテラズ (しているそうだ)・スルゴッタズ (するらしいそうだ)・スルヨッタズ (するようだそうだ)・スルミッタズ (するみたいだそうだ)
 (77) *スルズネ・*スルズタ・*スルズテラ・*スルズゴッタ・*スルズヨッタ・*スルズミッタ

「ズ」の直後には、名詞を置いて連体修飾が可能であるが、未然形と連用形と命令形は認められない。

²² 2モーラが1モーラになることは東京方言ほかでも「でしょう→でしょ」「そうして→そして」のように見られるが、南部方言に比べれば対立が明確である点が異なる。

- (78) 大学院サ行グズ人 (大学院に行くという人)
(79) アノ人, 大学院サ行グズ。(アノ人, 大学院に行くって)

言い切りの(79)が明確に間接証拠性(伝聞)の意味があるのに対して、連体修飾の(78)では伝聞の意味が後退しているようである。間接証拠性の意味が後退すると、標準語の「という」にかなり近くなり、単純に「間接性」だけが機能するようになる。(80)における「佐藤サンズ人」の「ズ」は、命題ではなく名詞についているため伝聞の意味合いは後退している。標準語の「佐藤さんという人」に相当し、知り合いでなく名前だけを知っている人物として「佐藤さん」をマークするために用いられている。この「ズ」は、伝聞と区別して「間接性のズ」のように呼ぶ。

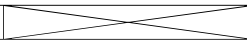
- (80) 佐藤サンズ人がガサッキ来タズ。(佐藤さんという人がさっき来たそうだ)

一方、(80)でも文末の「ズ」は伝聞と解することになる。「伝聞のズ」と呼ぶ。活用形としては、終止形と連体形のみを認める。仮定形のように見えるものがないわけではないので、以下で検証しておく。

- (81) 行グズンダラ (行くというなら)
(82) 行グズンダバ (行くというなら)

「ダラ」「ダバ」は、「ソレダラ簡単ダベ」(それなら簡単だろう)、あるいは「ソレダバウマグ行ガネ」(それではうまく行かない)のように使う、軽動詞「ダ」の活用形態である。「ダラ」は「ダ」の仮定形であり、「ダバ」は「ダラバ」が「ダンバ」から [da^mba] に転じ、前鼻音性を失って得られた形だと考えられる。「ダバ」は、係助詞「は」の限定性が感じられ、標準語の「では・じゃ」に相当する。(81)(82)は「ン」が介在しない形「行グズダラ」「行グズダバ」は不適格である。この「ン」は「の」の転訛と考えられ、「のだ」に相当する

「ンダ」が仮定形になり「ンダラ」が得られたと見るべきであろう。「のだ」同様に「ンダ」も命題につくので、そこに「ズ」が介在したもので、これらは「ズ」の活用形態の一種とは見なせない。(81)は標準語「行くっつーんなら」の対応形に過ぎない。「ン」が準体助詞であるとすれば、「ズ」は伝聞の意味が後退することもありうる。その場合は、間接性の「ズ」となる。以上、述べたように仮定形は認められないので、「ず」が終止形と連体形を兼ねており、陳述性の違いに基づく機能差が見られる、ということになる。まとめておこう。

終止（非修飾）	伝聞の「ズ」	
連体修飾	伝聞の「ズ」 ←（連続的） → 間接性の「ズ」	

また、「ズ」の直後に疑問の終助詞の「ガ」やモダリティ辞の「ベ」がそのまま後接するのには制約がある。

(83) ?行グズベ（行くって言ってるんだろ?）

これは不自然であるが、成立するとすると、「ベ」は確認要求であり、「ズ」は原義の「と言う」「と言っている」の意に解釈されるようである。ただし、「行グッテラベ」（後述）のほうが自然であり、「行グズンダベ」のほうが自然であって、後者の縮約形として(83)が聞かれるだけではないかとも思われるが、よくわからない。「行グズンダベ」は動詞に「ズ」が付き、「のだ」相当の「ンダ」が付いて、「ベ」が確認要求で用いられているものである。

(84) ?行グズガ（行くって言っているのか?）

疑問の「ガ」が付く(84)も不自然であるが、当事者以外に当事者の意向を尋ねるような場合には用いるようである。これは「のか」に相当する「ノガ」（このときは「ンガ」とはならない²³）を用いた「行グズノガ」の「ノ」が脱

落したとは考えにくい。「行グズガ」と「行グズノガ」は意味が異なる（後者にはノダの解釈が必要）からである。

もう一つ、伝聞に用いられる形に「ッテラ」がある。これは、「ッテ言ッテラ」の縮約形だと考えられる。それは、述部に付くと見られる(85)だけでなく、(86)(87)(88)のような例も見られるからである。

- (85) 行グッテラ (行くそうだ・行くと言っている)
- (86) 太郎ハ行ガネズドモ, 次郎ハ行グッテラ。(太郎は行かないそうだが, 次郎は行くと言っている)
- (87) 次郎ガ行グッテラッタ (次郎が行くと言っていた)
- (88) 次郎ガ行グッテラズ (次郎が行くと言っているそうだ)

(86)の「次郎ハ行グッテラ」は「次郎が『行く』と言っている」とも「次郎は行くそうだ」とも解しうる。しかし、この「ッテラ」は時制辞「タ」を後接することができ、用言性を持っていることがわかる。さらに、(88)のように「ズ」を後接させることもできる。これは、次郎が言っていることを伝聞したという意味、要するに又聞き解釈である。「ッテラ」は「って言ってる」の本義を残しており、文法化の途上にあると見ることになる。

4. まとめと課題

本論は、北奥方言の青森県旧南部藩方言のモダリティ辞のうち、「べ」、「ゴッタ」、「ヨッタ」「ミッタ」「ソッタ」、「ズ」「テラ」などについての記述と整理を行った。これ以外にモダリティの助動詞と見てよいようなものには、以下のようなものがある。

²³「行くのか」は東京方言では「行くんか」にはならない。近畿方言では「ンカ」で実現可能である。東京方言では「のだ」は「んだ」になるが、「のか」が「んか」にならないのは、南部方言で「ンダ」があって「ンカ」がないのと一致しており、広く東日本限の特徴と見るべきかもしれない。

- (89) ガモスレネ [gamosirene] (標準語の「かもしれない」に対応)
- (90) ニツガイネ [nitsigaine] (標準語の「に違いない」に対応)
- (91) ～ネバワガネ [nebawagane] (標準語に「なければならない」に対応。「ネバダメダ」「ネバナネ」など標準語同様に変異が見られる)
- (92) ハズダ [haⁿdzida～hadzuuda] (標準語の「はずだ」に対応)
- (93) ンダ [ⁿda] (標準語の「のだ」に対応)
- (94) モンダ [moⁿda～moⁿta] (標準語の「ものだ」に対応)
- (95) ワゲダ [wageda] (標準語の「わけだ」に対応)
- (96) ラスイ [rasi:] (標準語の「らしい」に対応)

これらのうち、(93)「んだ」と(94)「もんだ」は高位話体でなければ「のだ」「ものだ」にならない。また、おおむね用法も標準語と同じであるが、「のだ」のいわゆる命令用法に相当するものはもっと弱い意味合いになる。

- (97) もう帰るんだ。
- (98) ハア帰^{かえ}ンダ。

東京方言などでは、(97)は「帰れ」に比べれば理知的な命令とでも言うべき意味合いになる。南部方言での(98)は、「もう帰った方がいい」に近く、命令と言うよりは助言に近い。もちろん、帰らないと困った事態になるという意味合いを込めて多少強い助言とすることはありうるが、(98)の意味として(97)をあてるとずれが生じるようだ。

標準語の助動詞のうち、南部方言にないと見てよさそうなのが「行こう・食べよう」の「う・よう」(加藤.2006で希求助動詞と呼ぶもの)、また、その否定に相当する「行くまい」の「まい」、また、認識モダリティの「行くだろう」における「だろう」である。南部方言話者も、高位文体で話せば標準語の言い方を多く取り入れて話すことになるので、用いることはあるだろうが、方言話体では見られないと考えてよさそうである。「食べよう」は「食^くべルベ」

で実現され、「行くまい」は意志否定なら「行ガネ・行ガネベ」で、否定推量なら「行ガネゴッタ」で実現され、「行くだろう」は「行グゴッタ」で実現される。

敬体（丁寧体）は標準語の「行き-ます」を「行ギ-アンス」、「寒い-です」は「寒^{さむ}-アンス」、「静かです」は「静ガデ-アンス」、「いい天気です」は「イイ天気デ-アンス」のように、動詞・形容詞とわずに「アンス」で統一的に対応する。

アスペクトの「テラ」、時制の「タ」、否定「ネ」、使役の「セル・サセル」、受動の「レル・ラレル」はおおむね標準語「ている」「た」「ない」「せる・させる」「れる・られる」に対応するが、細かな違いもある。例えば、自発等を表す（逆使役）の「サル」（五段動詞でも一段動詞でも同じ形²⁴）があるため、ボイス上の分担関係が標準語とは異なる可能性を考えなければならない。

また時制辞の「タ」も標準語とは異なる使い方があり。例えば、ずっと読んでいた文庫本を近くに置いてトイレから戻ったら、文庫本を置いた場所が分からなくなり、「俺の本、どこかな？」と言った相手に対して、文庫本の場所を教えてあげるとき、東京方言では「ほら、そこにあるでしょ」「ほら、そこにあるじゃん」のように、「ある」を用い、「あった」は用いない。このとき「あった」は不適格である。これに対して、南部方言は「ホレ、ソゴサ、イダベ」のように動詞「イル」に時制辞「タ」をつけて使う。「イル」のまま時制辞をつけなくても適格だが、「イダ」とするのがより自然である²⁵。

加えて、各地の方言に散見される現象でもあるが、南部方言でも時制辞を反復することが可能である。「見ダ」に加えて「見ダッタ」という形があり、意味的な対立を持つ。本来、「た」は「たり」に由来するとされ、「たり」は「て・あり」の縮約形であるので、「て・あり・て・あり」が可能である以上、

²⁴ 札幌方言では、五段動詞に「サル」、一段動詞には「ラサル」と分化している。

²⁵ 南部方言では、無生物でも移動可能な具体的存在物には「イル」を使う。「鞆がある」の意で「鞆ガイル」、「ない」の意で「イナイ」、「なくなる」の意で「イナグナル」という。しかし、具象物であっても移動できない家屋については、「アル」を用い、「大きい家がある」は「大ツキタ家、アル」と言い、「イル」とは言えない。

理論的には「たりたり」という形態が生成される可能性はある。標準語では、それが意味的なブロックなどによって成立しなかったのが、南部方言などでは「タッタ」が成立するのである。

- (99) 【テーブルの上に置いた自分のお菓子を弟が盗み食いしたと思っ
て問い詰める】「今、{取ッタ/*取ツタッタ}ベ？」
- (100) 【(99)と同じ状況だが、盗み食いしたのは去年のこと】「去年ノ今頃、
オラノオ菓子、{取ッタ/取ツタッタ}ベ？」

本論では、いわゆる助詞に含めるべきモダリティ辞については、触れていない。「べ」に関しては助詞化していると見るので、分類上は助詞になるが、それ以外は助動詞としている。南部方言は、「よ・ね・な・か」など標準語と共通する終助詞も無論持っているが、「行グツキヤ」における「ツキヤ」、「行グジャ」における「ジャ」など標準語にはない形式も持っている。今回扱えなかったものについては、機会をつくり、論じることにしたい。

参考文献

- 井上史雄. 2001. 『計量的方言区画』明治書院
- 加藤正信. 1977. 「方言区画論」『岩波講座日本語 11 方言』岩波書店, pp. 41-82
- 加藤重広. 2003. 『日本語修飾構造の語用論的研究』ひつじ書房
- 加藤重広. 2006. 『日本語文法入門ハンドブック』研究社
- 加藤重広. 2007. 「日本語の述部構造と境界性」『北海道大学文学研究科紀要』122号, pp. 97-155
- 金田一春彦. 1955. 「日本語 (V. 方言)」『世界言語概説 (下)』市河三喜 (編), 研究社, pp. 149-305
- 東条 操. 1953. 『日本方言学』吉川弘文館
- 佐藤和之ほか. 2003. 『青森県のことば』平山輝男 (編) 明治書院
- 佐藤亮一. 1976. 「北海道方言の地理的背景 —『日本語地図』第4集について—」『佐藤喜代治教授退官記念国語学論集』桜楓社, pp. 583-601
- 柴田 武. 1996. 「北海道方言と新潟県方言新潟県方言と山形県方言」『言語学林』1995-1996 言語学林編集委員会 (編), 三省堂, pp. 825-831

北奥方言のモダリティ辞

都竹通年雄. 1949. 「日本語の方言区分けと新潟県方言」『季刊国語』3-1 群馬国語文化研究所

Horn, Laurence R. 1982. “Toward a New Taxonomy for Pragmatic Inference: Q-based and R-based Implicature” *Meaning, Form and Use in Context*, Deborah, Schiffrin (ed). Washington D. C.: Georgetown University Press, pp. 11-48.